

宝もの見つけた子どもたち ～NPOと連携した筑後川総合学習支援～

国土交通省 九州地方整備局 筑後川河川事務所 調査課
○ 御手洗瑞枝

平成14年度より全国の小中学校において「総合学習」が正式に学校教育の中に導入されている。私たちの暮らしの中での「河川」は、最も身近な自然空間であるが、その自然を体験しながら学べる「河川環境学習」を題材としたテーマは、学校教育の中でも非常に関心の高い分野となっている。

福岡県北野町立弓削小学校4年生は、「子どもたちの生活と筑後川との関係」を第2学期「総合学習」のテーマとしたことから、学校側から総合学習支援依頼を受けたNPO法人；筑後川流域連携倶楽部と協力しながら、総合学習の支援を行うこととなった。ここでは支援活動の内容及びその成果、並びに今後の河川環境学習における課題について述べる。

【キーワード】コミュニケーション、環境保全

1. 「総合学習」における環境学習のニーズ

平成14年度より全国の小中学校において「総合学習」が正式に学校教育の中に導入されている。

「総合学習」における「河川環境学習」への期待は高く、小中学校教師に対して実施したアンケートでは、「総合学習」におけるテーマとして「河川環境学習に注目している」と回答した教師が全体の7割を超えるという結果が得られている。(図-1)

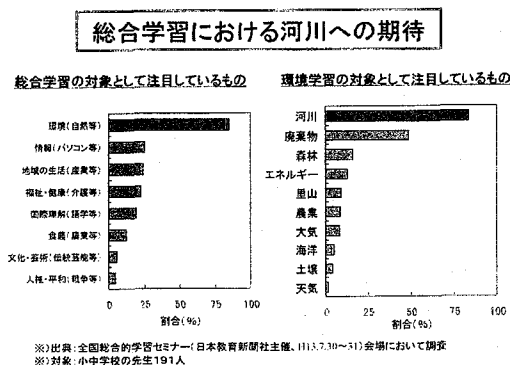


図-1 総合学習における河川への期待

2. 環境学習のねらい

子どもたちにとって自然体験活動とは、道徳観や正義感を育むうえでも効果的であることが図-2のとおり示されている。また河川管理者にとっても、河川に対する正しい知識と親しみを子どもたちが楽

しんで学ぶことができる好機と捉えている。

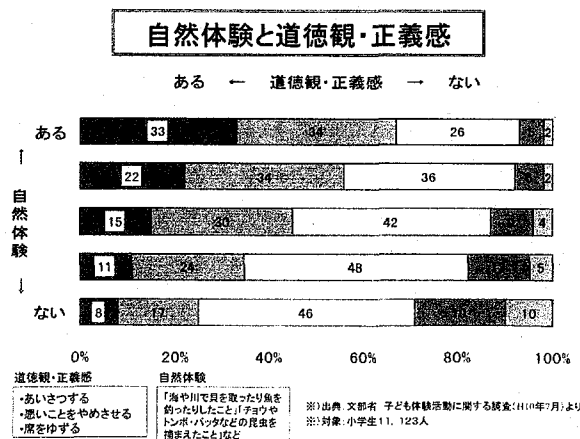


図-2 自然体験と道徳観・正義感

3. NPOとの連携支援

今回の総合学習支援は「子どもたちの生活と筑後川との関係」を第2学期総合学習のテーマと定めた、福岡県北野町立弓削小学校4年生教師からの総合学習の支援依頼を受けたことが始まりであった。

北野町は全国に先駆けて平成4年にポイ捨て条例を制定しており、このような中で河川における環境をアプローチしたいという担当教師の要望により支援を行うこととなった。支援についてはNPO法人；筑後川

流域連携倶楽部との協力体制により実施した。

NPO法人；筑後川流域連携倶楽部は、筑後川流域圏における環境向上や文化及び産業復興の発展に寄与する目的で様々な活動を行っている市民団体である。当事務所との間でも、市民団体とのパイプ役を担い、各種市民活動における情報の共有や住民との交流活動など、連携した様々な活動を行ってきた。

今回の「総合学習」は、子どもたちの生活と筑後川との関係を表す「弓削の水マップ」を作成していく中で、「水」という視点から地域を見つめるとともに、筑後川と自らの生活との関係を考えるきっかけとなることを学習の目的と定めた。

4. 「弓削の水マップ」作成

子どもたちによる「弓削の水マップ」作成は、以下の手順で行われた。

(1) プロローグ

水と人との関わりについて議論する。(図-3)



図-3 NPOによる説明。

“水”がどこへ流れていくのか話し合う。



図-4 子どもたちの身近な“水”の流れを確認する。

(2) 問題意識・調査準備

身近な水の流れについて話し合う。併せて現地調査の準備。(図-3)

(3) 現地調査

地域の水の流れを調査・確認する。(図-4)

(4) 地図の作成

地図の作成と現地調査結果のとりまとめ。(図-5)

(5) 現地調査

水質、流速、生物調査。(図-6)

(6) 「弓削の水マップ」の作成

地図情報の充実。(図-7)

(7) 発表の準備

発表方法の検討及び準備。(図-8)

(8) 発表

「弓削の水マップ」の紹介と意見交換。(図-9, 10)



図-5 皆で集めた“水”の情報。



図-6 “水”を追いかけていくと、筑後川に出た！

自らの生活と筑後川との関連を確認。

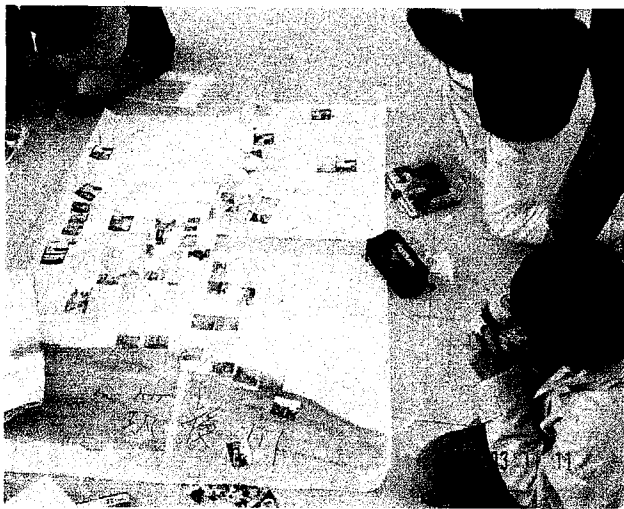


図-7 どんどん形になってくる
「弓削の水マップ」

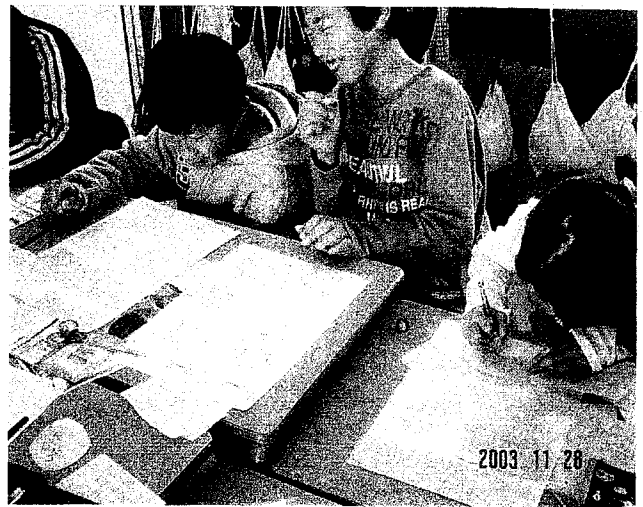


図-8 発表準備中…。

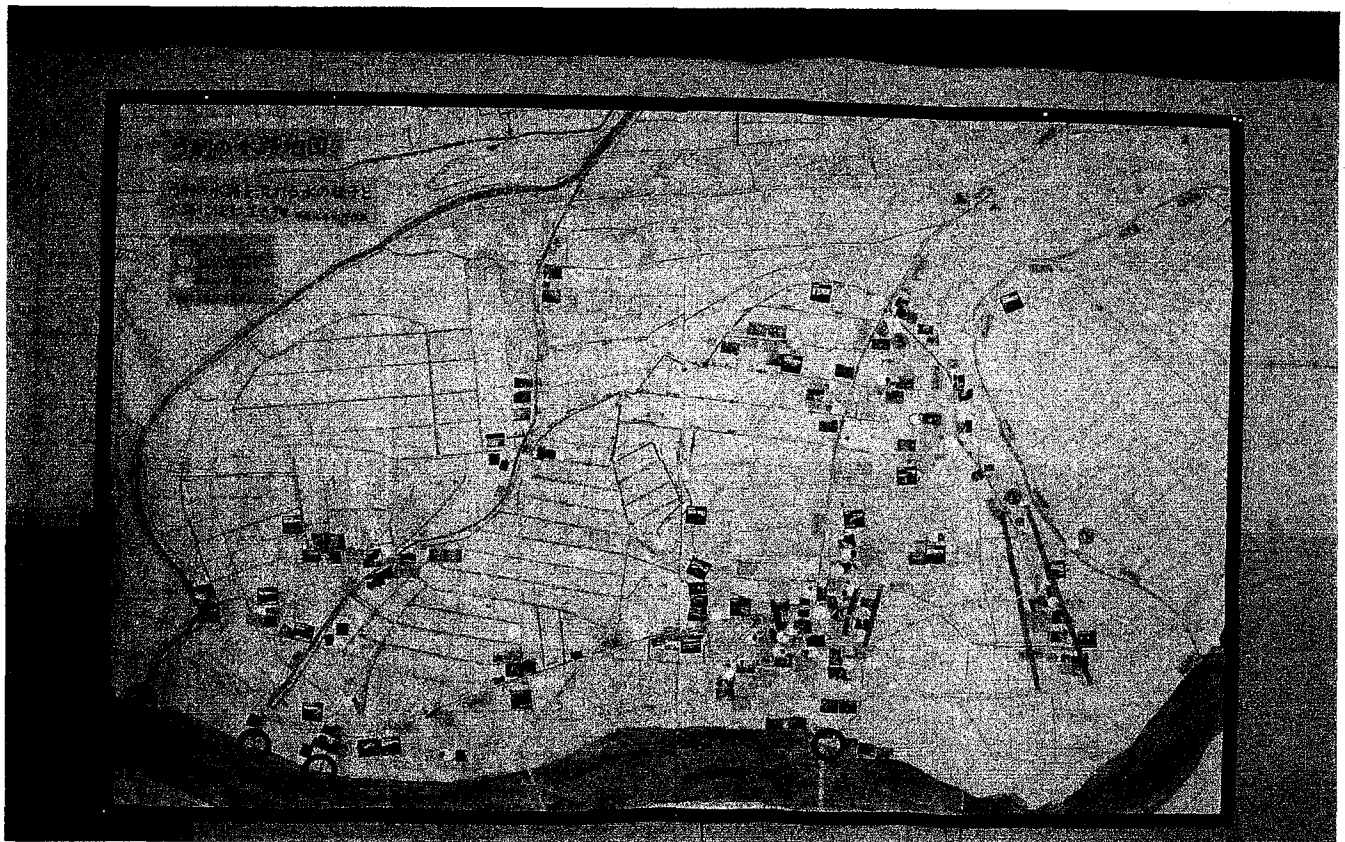


図-9 「弓削の水マップ」完成！
縦3m・横4mの大傑作。

きれいな筑後川を守る為に、自分たちでできることは何か。子どもたちなりに導き出した筑後川に対する思いや考えを発表。

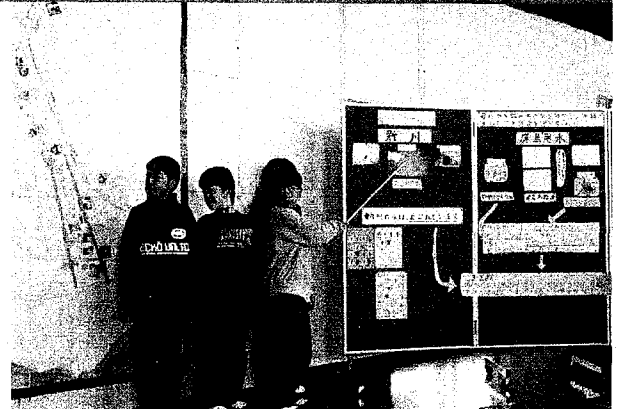


図-10 発表と意見交換。

5. 成果

今回の支援活動の成果は、以下のとおりである。

(1) 子どもたち

子どもたち自身が自分の目線で「筑後川と自らの生活との関係」を見つめるきっかけとなり、「筑後川」を自分たちの身近な川として、また川への親近感と河川環境への保全意識を持つことができた。

(2) 教育者、NPO

総合学習における実績を積み、学校教師だけではカバーできない環境学習面での協力体制を形成できた。また地域の指導者としてNPOが経験を積み、今後の継続的な総合学習支援へのステップとなった。

(3) 河川管理者

教育者やNPOや行政が「連携」した今回のケースは、小学校教師の総合学習部会において研究授業として取り上げられ、多くの教育関係者から高い授業評価が得られた。

(図-11)

3ヶ月という支援期間のなかで、支援側と子どもたちの間に新たな交流が生まれた。それは見える形での地域とのつながりとなった。そして学習を通して子どもたちの中に河川への愛着や環境保全への配慮など、河川愛護精神が育っている手応えを感じた。

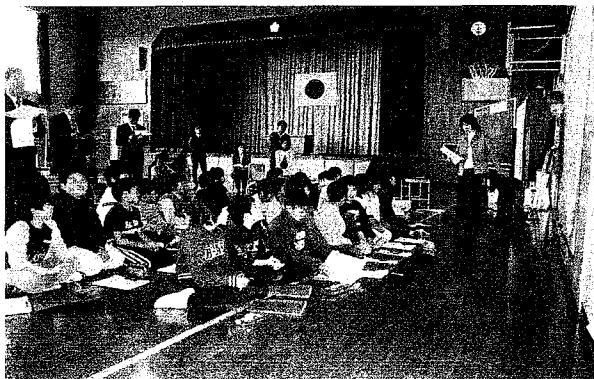


図-11 研究授業風景
三井・小郡地区の
総合学習担当教師らが見学。

6. 今後の課題

環境学習をテーマにした総合学習支援には、多くの時間と手間を要するため、ノウハウを持った人材の確保が必要となってくる。今回の支援については、NPOが主体となって環境学習の企画・進行を行い、教師及び河川管理者はその補助的役割を担った。今後は教育者、NPO、河川管理者が共に各自の役割を明確にしていくことで互いにカバーし合い、NPOを軸とした地域に根ざした環境学習指導者のフォローアップをしていくことで、人材不足の解消を図る必要がある。

7. 総合学習支援を終えて

総合学習支援での何よりの宝ものは、熱心に筑後川について学ぶ子どもたちの姿、そして子どもたちの元気な笑顔であった。環境学習の授業を毎回楽しみにしてくれる子どもたちの姿に、今後の学校教育現場における河川環境学習の効果の大きさとニーズの高さを感じた。また河川行政に携わる者として、河川を通して子どもたちの学習を支援できたことは、筑後川と子ども達との距離を縮めることができたという確かな手応えを得、そして今後の業務での大きな励みになっている。それは支援者である我々にとっても代え難い宝ものとなった。(図-12)



図-12 筑後川をバックに記念撮影。